

観音寺所蔵「琴弾宮絵縁起」の諸問題 — 縁起文と景観表現の分析を中心に —

東京芸術大学 田光 美佳子

香川県観音寺市の観音寺に所蔵される「^{ことびきのみやええんぎ}琴弾宮絵縁起」(重文、絹本着色、一幅)は、瀬戸内海を背景に琴弾八幡宮(以下、琴弾宮)の鎮座する琴弾山周辺の景観を描いた掛幅であり、画中には琴弾宮草創縁起の一部が絵画化されている。本図に関する総合的な考察は未だ見えず、画面と縁起文の関係や様式的特色より窺える制作時期の検討など、作品自体への言及は不十分である。しかし、景観主体の画面構成に関しては以前より社頭図との近似性が指摘されており、また近年では本図を垂迹画とは異なる神域景観図と捉え直すことで、中世における自然観の再解釈が試みられている。そこで本発表は縁起文と景観表現の分析を中心に、本図における景観の意味について述べるものである。

琴弾宮草創縁起は観音寺と琴弾宮にそれぞれ伝存する『讃州七宝山縁起』(徳治二年(1307))・『讃岐国七宝山八幡^(ママ)琴引宮縁起』(応永二三年(1416)、足利義持署判、清水谷実秋書写)に語られている。その内容は前者が空海の誕生から讃岐修行を、後者が神功皇后の三韓討伐を主題とする点で異なるが、琴弾宮草創縁起を記す点で一致する。両縁起を総合すると、琴弾宮の興りは大宝三年(703)、皇統繁栄と国家鎮護のため宇佐を出立した八幡大菩薩が琴弾山に影向し、靈験を示した経緯より当地に勧請されたことを契機とする。今回、両縁起文と画面との対応関係を照合した結果、後者と共通性の多いことが判明した。ただし後者の成立年代は縁起文の浄書された時期であり、ここで縁起文自体が起草されたとは考え難い。従って祖本の成立は一五世紀前半を遡ると推定され、本図と縁起文における相関関係の密接なことが理解される。

次いで制作時期の検討であるが、本図は鎌倉時代中期から末期の作と言われている。しかし、従来の研究は同時期における諸作例との比較までに至っていない。そこで画面を分析したところ、汀を二重にする洲浜や樹木の群生する山容などの景観描写、洲浜と松林の組み合わせ、あるいは鹿や鳥の群れ・漁撈の民などのモチーフより、古代から中世にわたって見受けられる描法や定型的な図様が踏襲されていることを指摘できた。これらは様式的に一三世紀末期から一四世紀初頭の作例と通じることから、本図を鎌倉時代末期の成立と位置付けた。

本図からは琴弾宮周辺の景観を意識したと思しき要素が見て取れる。それは現地調査の結果、井戸や巨石など指標物の位置がほぼ一致していることから認められる。その一方で碧空や洲浜の表現・参道と社殿の強調は先行の浄土教絵画や宮曼荼羅に倣うものである。これは本図に社寺の縁起を絵画化する縁起絵としての側面と共に、琴弾宮一帯を浄土とみなす礼拝図としての側面も含まれることを意味する。つまり、本図は琴弾宮周辺の実状を基盤にこれら絵画の性格を同時に表わした作例であり、この複合性に中世景観表現の側面が示されているとも言える。